

ブレイクスルー

その時、先人は

3 成長期

戦後、昭和50年

ほ場整備に始まった
まちづくり

旧・猿投町の中心地であった四郷地区。昭和30年（1955）頃の田畑は形がいびつな上、狭小で農道も整備されておらず、低い生産性に甘んじている状況であった。時代は高度経済成長期。工業をはじめとする他産業との所得格差が広がり、農業の近代化・機械化に向けた基盤整備の必要性が強く叫ばれるようになる。そうした中、地域住民の念だった国鉄岡多線の線路建設計画が持ち上がり、線路によって四郷の水田地帯が分断される懸念が生じた。そこで、最適な農地の活用と農業経営の合理化・安定化を図るため、四郷を含む旧・猿投町は県営ほ場整備事業を決意。昭和40年度（1965）に着工し、岡多線、猿投グリーンロード等の関連事業と合わせ、昭和47年（1972）7月に面積502ヘクタールを完成させる。その直後、7月12日から13日にかけて西三河一帯を襲った集中豪雨により籠川の氾濫、枝下用水の決壊と大災害を被ったが、災害復旧工事を1年余りで完了し、およそ8年にわたった全事業を完成させた。

ほ上整備前の南部工区の様子。大小さまざまな形の田が広がる



ほ場整備後、南部工区周辺の空撮。入り組んだ田が整然と整備された

ほ場整備のきっかけは
岡多線建設計画

農業地帯580・5ヘクタールを対象に、総事業費約8億6000万円をかけた旧・猿投地区の県営ほ場整備事業は昭和49年（1974）3月26日の北部工区換地会議でもって全事業を完了した。

昭和40年（1965）12月の着工以来、8年余りに及ぶ壮大な事業であったほ場整備事業の発端は、地元住民の数十年にわたる悲願であった岡崎・多治見を結ぶ岡多線（現・愛知環状鉄道）が昭和34年（1959）、工事線に採択されたことに始まる。



国鉄岡多線の建設（豊田市・昭和49年）

鉄道の敷設は地域開発の意味合いが強く、岡崎市をはじめとする沿線市町村は大正10年（1921）頃より陳情活動を繰り返していた。昭和2年（1927）に「愛知県岡崎ヨリ拳母ヲ経テ岐阜県多治見ニ至ル鉄道」として予定鉄道路線に追加され、同10年（1935）に線路建設が決まったものの、戦争で中断。時は流れ、同32年（1957）の鉄道建設審議会と同線が調査線に、同34年（1959）に工事線、同39年（1964）に「国鉄新線」の一つに規定される。

しかし、同線が敷設されると四郷の水田地帯が分断され、土地利用や農作業に支障を来す。当時、下古屋区長であった磯村貴一氏は近所に住んでいた浦野幸男代議士から岡多線の計画を聞き、自宅に下宿していた加藤光男氏に相談。加藤氏は豊田農地開発事務所に勤務し、ほ場整備の仕事をしていたという。加藤氏の助言もあり、磯村氏は天道、下古屋、上原、井上の自治区役員と話し合いを重ね、四郷区域だけでもほ場整備をやろうとなった。これを聞いた豊田農地開発事務所の天池正所長が規模を大きくして県営事業としてやってはどうかと提案。磯村氏たちが螺澤利三郎猿投町長に伝えると、螺澤町長は熟慮の末、四郷のみならず町全域でやると決断し、猿投町始

まって以来の一大事業、愛知県第2号の県営ほ場整備事業として動き出すことになる。

国を挙げ、農業の近代化・大型化を図る

ほ場整備事業の背景には、農業を取り巻く状況と国の動きもあった。

昭和30年代の高度経済成長期、若年労働力の流出や農業・工業間の所得格差が広がり、「農業の曲がり角」という言葉がさやかれるようになった。そこで国は農業生産性の向上と農家所得の増大を目的に昭和36年（1961）、「農業基本法」を制定。大規模化や機械化を推し進め、自立経営農家の育成を図る。

猿投地域においても同様に農業人口が他産業へ流れ、所得も自動車関連企業で働く人たちより低いと嘆く状況であった。大型農用機械の使用もほとんど見られなかった。

猿投土地改良区を設立
昭和40年度に着工

ほ場整備事業に難色を示す農家も多い中、区長や町職員、推進委員は同意を得るため日



県営ほ場整備事業の実施を伝える「広報猿投」（昭和40年6月10日第48号）



猿投土地改良区設立認可申請書（昭和40年8月）

猿投土地改良区設立発起人41名には四郷出身の渡辺武、磯村貴一、吉田鉄二、吉田初夫、今井一郎、鈴木彦五郎、福岡鉄二、篠沢亮幸、大橋景之助、山田正則が名を連ねる。



四郷町周辺のほ場整備前の地図（手書き）
土地の大きさも形もさまざま。地権者も多く、土地が入り組んでいることがわかる

旧猿投町におけるほ場整備前と後での農用機械数

区分	耕うん機・トラクター		動力噴霧機		動力散粉機		農用トラック	
	農家数	台数	農家数	台数	農家数	台数	農家数	台数
昭和40年	404	409	1104	1104	97	97	783	799
昭和50年	6154	7831	1902	1912	1656	1659	2101	2175

出典：『猿投土地改良区25年の歩み』



ほ場整備前(上)と後(下)の南部工区



夜奔走。最終的に総数の92・5%の同意を取り付ける。昭和40年(1965)12月22日付で猿投土地改良区設立の認可を愛知県知事より受領。同年度事業として着手し、翌年1月26日に猿投町役場において猿投土地改良区設立総会が開催された。

ようやく施工に漕ぎつけたものの、前例のない事業であったため前途多難であった。猿投土地改良区設立発起人の一人で、理事、事務長、初代螺澤理事長の後を継ぎ2代目理事長として同事業を率いた福岡銃二氏は当時を振り返る。

〳〵人情と絆〳〵が 整備事業の推進力に

「この辺りには整地のできる業者がなかつ

た。ほいだで、北海道から湿地ブルを何台か持ってきてやった。大手の業者が2つか3つ入ってきたけど、みんな損こいちゃってね。ほれは、地形を知らんもんでね。名古屋の方は堆積土だもんで土の層が決まっとるだよ。いくら削っても米の取れる土や砂が出てくる。だけど、ここらは一枚一枚土の質が違う。田の表土をもってきて5年もすると沈下して土地に高いところや低いところが出て湧水が出るでね。ひどいと石を持っていって苗を立てておく有様だった。ブルが来てもはまっちゃってね。矢作建設だけが地元だもんで、赤字でも辛抱して残ってくれたんだ」。

礫が出れば人海戦術で取り除き、耕うん機が埋まれば役員みんなで引き上げた。

矢作建設は『猿投土地改良区25年の歩み』で「この工事で忘れることができないのは、福岡現理事長をはじめとする改良区の皆様のご助力でありました。なかでも、我々の内情や取組み姿勢を深くご理解下さった理事長が、作業員宿舎として納屋や土地を無償で貸与下さったことあります」と記している。

畑で採れたスイカやダイコンを持たせたり、熱を出した県の職員に温かい握り飯を食べさせ、介抱したこともあったと話す福岡氏。「お祭りになると県の人も市の人も『おまんとこ

行くぞ』と言ってね。その時分は今のようなことはないもんで、みんな家に来て、『手酌だぞ』ってやっておっただよ。県の人も一生懸命やってくれたしね。ほいだで、私は『猿投会』というのを作ってね。何十年とやってきただよ。うちのおふくろが『人のために尽くさなアカン』という人だったからね」。

不首尾に終わった コンピュータでの換地

ほ場整備事業は当初、工事を先行。整地が完了したところから換地作業に入った。感情を交えずやれるということで県から換地の組み合わせにはコンピュータ(当時は電子計算機と呼んでいた)を使うよう指示があり、うまくいくのか半信半疑ながらも労力的に助かるなら、と取り入れることになったという。ところが、不安は的中。プログラムが東北地方の換地をモデルに組まれており、基準となる「条件」がそもそも違っていたと福岡氏は話す。

「ここらはみんな道路沿いの田んぼがよいと。東北の方は通り沿いだと電線に鳥が来て、鳥害があるからそういうところはやめたい。水もあつちは用水でやつのけど、ここらは川から直接引いとるでね」。

S45
大字四郷から四郷町へ
市街化調整区域に編入 ● 1970



猿投グリーンロードの開通を祝う市民たち

S47
猿投グリーンロード開通
47年7月豪雨災害 ● 1972

猿投グリーンロードの用地不足を
北部の換地計画で補正

こうした事情をプログラム担当者に説明しに福岡氏と豊田農地開発事務所の総務課換地係長であった池田欣一氏は東京まで足を運んだが、ようやくでき上がった換地計画書を点検すると集団化が強く図られたため小さい面積の人が遠くへ飛ばされたり、コード記入ミスによる手違いがあったりした。そこで福岡氏が取った策は——「大方手直ししちゃった。ほいで、コンピューターでやったといつて発表しちゃった（笑）」。

「はじめは、整地や換地に不満を言われて『土地改悪』と言われたこともあった。ほいで、もね、土が良くなった田んぼもあるもんで、結果的には全体的によく米が取れちゃった。それで、『土地改良をしてよかった』と言われて全て解決したよ」。

整備事業最終年度に発生した
昭和47年7月豪雨災害

昭和47年度はほ場整備事業の最終年度で
猿投グリーンロードは名古屋市中央部より
東名高速道路名古屋インターチェンジを経て
豊田市北部を東西に横断し、三河山間部へ直
結する道路として計画された有料道路である。
農山村の過疎化解消や地域社会の産業発展、
住民生活の福祉の向上といった期待がかけら
れ、建設計画が発表されたのは昭和43年
(1968)1月。工事は同年5月に始まり、
豊田市力石町を起点、愛知郡長久手町(現・長
久手市)を終点とする延長1万4225メー
トル、全幅11メートルの規模で同47年(1972)
3月に完了した。ほ場整備事業は道路南側を
昭和45年度、同47年度に、北側を同46年度に施
工したため道路の法面先に高低差が生じ、そ
の部分の用地の過不足は北部工区の換地計
画によって補正した。



甚大な被害をもたらした47・7豪雨(豊田市錦町)

同年7月12日、西三河一帯を集中豪雨が襲う。猿投ではこの日の9時から翌日9時まで
に309ミリの降雨を記録。土砂崩れや河川
の氾濫が相次ぎ、豊田市で9名、小原村で32
名、藤岡村で22名、足助村で4名と67名もの死
者を出す大惨事となった。

ほ場整備事業はほぼ工事が完了し換地処
分を急いでいた時期だったが、籠川が現在の
内浜化成株式会社(当時の内浜工業株式会
社)裏の堤防と上原町上原橋上流100メー
トルの2カ所で、枝下用水が花本町地内で決
壊。農地に濁流が流れ込み、辺り一面水につか
る状態であった。排水路は水が溢れ、整備した
畦道は全域にわたり崩壊した。
福岡氏はこの日のことを鮮明に覚えている
という。

「私が議員になって2年目だ。夜ね、井上と
いうところに水神池ちゅう池があつて、『水神
池が満杯で決壊しちゃうとえらいことになる』と私のところに電話があつた。国道
419号に消防署の出張所があつたもんで、
そこへ寄つて、消防員を連れていこうと思つて
行つたらね。一人留守番がおるだけでみんな
出ちゃつてた。しょうがないもんでハンマー借
りてね、猿投駅へ行こうと思つたらどえりや
あ雨でね。車の窓開けて首出して前を見な進
めへん。水神池のブロックを破つて水を放流し
て決壊を防いだんだけどね。雨でこんなふう
になるとは夢にも思わなかった。怖かったよ。
枝下用水が逆流しとつてね。プロパンがぶか
ぶか浮いて流れておつた。うちの隣に駐車場



S34 伊勢湾台風 ● 1959 S39 岡多線が工事線に採択 ● 1964 S40 猿投土地改良区設立認可 県営ほ場整備事業工事着手 ● 1965



ほ場整備事業における47・7豪雨災害復旧工事は1年ほどで完工した(写真は豊田市勘八町地内国道153号)

S42 猿投町が豊田市に編入 ● 1967



昭和34年(1959)に発生した伊勢湾台風での被害の様子(挙母神社)

があるだら。井上から回って、あそこで車の向きを変えようと思って西を見たら、籠川が切れて、県道が川になった。ほいだから、私はその後、この地域の排水をどういう形で整備すればいいかわかっただ」。

猿投土地改良区は豪雨による被害を受け、補助金を申請。昭和47年度(1972)末までに復旧工事を完了させ、同48年度(1973)の水稲作付けに間に合わせた。この災害を教訓に、ほ場整備事業の設計基準は排水路計画を中心に置くようになった。

みんなで知恵を補い合って
100%にする

8年余りに及んだほ場整備事業は昭和45年度(1970)に南部、同48年度(1973)に西部、北部で換地会議が行われ、全事業を完了した。最初こそ苦情や反対の声が寄せられたが、「ほ場を整備したらどこも思ったより米が多く穫れて、全部解決した」と福岡氏は述懐する。

「いちばん助かったのは、ブル入れて田んぼの土をいじくるだ。ほいだら、それまでザル田であったのがブルの重みで床がでぎちゃった。田んぼの水の持ちがどえりゃあよくなつて、1週間くらい持つようになった。ほれだもんで、矢作ダムから水をもらおうと頼んであったんだけど地元の人が必要ないということに

なり、誰も農林省に行く人がおらんもんで、私が行っただ。事情を説明したら『ほ場整備をやって水が要らなくなったのはおまんこだけだがや』と言われた」。

まちづくりの土台となった一大事業をどのように成功に導いたのか。福岡氏は言う。

「全身全霊をかけてやった。私が思うに、人間は100%じゃあかん。70%以下だと『あいつはダメだ』となるけど、ちいと補ってやれば100%になるとなりやあ、みんなが助けしてくれるで。私の性格はそういうこと。みんなで知恵を補って100%にするということだけは心得とるでね。ほいだもんで、何をやっても全部まとまっちゃうだ(笑)」。

コラム 豪雨の土砂崩れで遺跡が発見される

昭和47年(1972)7月豪雨で発生した土砂崩れにより、伊保川と籠川の合流点に近い丘陵(四郷町西山)で欠山式の土器片が見つかった。パレススタイルの壺をはじめ、約30点の遺物の多くは弥生時代終末期のものと考えられている。

伊保遺跡および神郷下遺跡もほ場整備事業によって発見されたもので、猿投遺跡調査会が昭和44年(1969)と45年(1970)の2回にわたり発掘調査を行った。その結果、猿投地域には多くの遺跡が埋まっていることが判明し、後世に郷土の歴史を伝えるべく福岡氏を発起人とする有志が『猿投の遺跡』を刊行している。



左:故 山田正則氏開墾中に出土した遺物(福岡銃二氏所有)

